

豊かさを語る



人と人の
間で生まれる
豊かさという
価値



マリ
クリスティーヌ 氏
異文化コミュニケーター

今日、ビジネスではグローバルスタンダードが当たり前になっているが、私たちの生活の豊かさを考えていく上でもグローバルな視点からとらえていくことは重要である。外(海外)から見た場合、日本とはどのように映るのだろうか？

今号は、異文化コミュニケーターのマリ クリスティーヌ氏を迎え、マリ氏の目に映る日本について語っていただいた。また、海外で生活し、国際的なフィールドで活躍されるマリ氏が考える豊かさについてもお話をうかがった。

希望を持つということ、自分の身の丈にあわせて選択するということ

野口参与(以下、野口): 日本の豊かさを考えていくとき、海外からの視点も踏まえ多様な視点で考えてみるのが大切だと思います。マリさんは異文化コミュニケーターの肩書きをお持ちで、愛知万博の広報プロデューサーや、AWC (Asian Women & Children's Network) 理事など、国際的なフィールドでもご活躍されています。また、国内外での生活の経験があり、さまざまな文化をご存知だと思います。マリさんの目から見て、日本はどのように映っているのでしょうか。

マリ クリスティーヌ氏(以下、マリ): 一言で申し上げるのは難しいですが、日本には多面性があるので、どの角度から見えていくかによって見え方は変わってきます。たとえば、経済という観点で見れば日本は世界のマーケットの重要な一部ですし、文化的な視点で見れば、サムライ、柔道、空手、相撲など、神秘の世界が見て取れます。また、戦後の一時期は、日本といえば富士山、芸者、チョンマゲというとらえ方をされていましたよね。最近では、「TSUNAMI」という言葉がクローズアップされました。さらにはマンガやオタク文化などは世界をリードしています。

野口 視点によって日本が全然違って見えるというご意見は全くその通りだと思います。マリさんはいま、AWCの活動で、タイの山岳部に学校を作ったりして、現地の子どもたちに会う機会があると思いますが、現地の子供たちと日本の子供たちを比べてみてお気づきの点はおありですか。



聞き手
株式会社三菱総合研究所
参与
野口和彦

株式会社三菱総合研究所
地域経営研究センター
研究部長
小松史郎

マリ クリスティーヌ
MARI CHRISTINE

異文化コミュニケーター
国連ハビタット親善大使
2005年日本国際博覧会 広報プロデューサー

父親の仕事に伴い4歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。単身帰国後、上智大学国際学部比較文化学科卒業。この頃スカウトがきっかけで芸能界へ。

1994年 東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。今現在も都市工学を学んでいる。生まれながらの環境から学んだ幅広い視点から国際会議・式典等の司会、講演活動など多方面にわたる活動をこなす。

AWC(アジアの女性と子どもネットワーク)代表(<http://www.awcnetwork.org>)をつとめることから、ボランティア活動などにも精力的に活動している。

2000年6月 国際連合人間居住計画(国連ハビタット)親善大使
United Nations Human Settlement Programme (UN-HABITAT)に任命される。
(広報活動、また、居住問題の解決のための活動を続けている。)

2002年 2005年日本国際博覧会 広報プロデューサーに任命される。

主な委員会活動 「地方制度調査会」総務省／「国土審議会首都圏整備分科会」国土交通省／「社会資本整備審議会」国土交通省／「観光立国推進戦略会議」内閣府／「文化外交推進懇談会」外務省 など

豊かさを語る

マリ 先進諸国の近代の一番大きな問題は、夢がどんどん実現してしまい子どもたちが夢を持ってなくなってしまったことです。アメリカでも1990年代にそのような状況に陥りましたが、日本のいまの子どもたちは、「どうせ未来はこんなものだ」とすでにあきらめが入っており、頑張らなくなっています。それに比べタイの山間部などアジア各国の子どもたちの目には輝きがあります。彼らの周りには、日本のようにモノが潤沢になく、何もかもが新鮮で、これからどんどんよくなっていくという希望に満ち溢れているからです。

野口 小松さんは、希望を持つ、夢を持つということについて何かお考えになることはありますか。



小松研究部長(以下、小松)：戦後の日本を振り返ると、当時は、アメリカ人の老夫婦が海外旅行をしている姿に憧れを持ちました。それがいまは、日本人も海外旅行に行くようになりました。しかし、

あの頃のアメリカ人の老夫婦のように、いまの日本人がアジアの国々の人たちから羨望を受けたり、尊敬されたりしているかという、されているようには思えません。日本は経済的には豊かだと言われますが、憧れや尊敬の対象にはなっていないように感じるのです。

マリ それは、アジア的文化の価値観と欧米文化の価値観には違いがあるからではないでしょうか。エレガンスや、優雅さなどを考えたとき、欧米的エレ

ガンスと日本的エレガンスは異なります。中国人の大金持ちを見ても、何でこんなにせわしいのかと感ずることがあります。私は、エレガンスは教養を伴うもので、アジアの中でも教養が高く、お金持ちの方は、やはり欧米的なエレガンスを感じます。教養がついてこない、どんなに物質的に豊かでも、人や物に対する態度は豊かではない気がするのです。

野口 日本人は、豊かであるとかカッコいいということ、周りからどう見えるかといった外からの尺度によって図るところがあると思います。でも、ある外国の豊かさは、自分の中できちっとした目安があって、それで自分自身を図り、豊かさにつなげていますよね。

マリ それは、何を持つかではなく、何を選択するかだと思います。すべてを持てるのは大富豪でなければ不可能かだと思います。ですから自分の身の丈にあわせて選んでいくことが重要なのではないのでしょうか。たとえば、欧米諸国では、バケーションという考え方があり、長期滞在型の旅行をします。長期滞在をするのだから、皆大金持ちかというところではない。彼らは長期滞在するためのリゾート地に重きを置いて普段からお金を貯めています。だから普段の生活が多少苦しくても、そのお金には手をつけません。ところが日本人は、本来旅行のために貯めていたお金を、生活が苦しくなると、「まあいいか」と言って使ってしまう。これでは、本当の意味でのゆとりや豊かさを感じられないのです。

野口 ゆとりを感じるには、あることは我慢することも必要なのかもしれませんね。

人と人の
間で生まれる
豊かさという価値

マリ そうですね。それと選択をすること。アメリカ人が、よくオンボロ車に乗っているのを見かけますが、その分、家にこだわりを持っていたとします。車はオンボロだけど、彼らの家は大邸宅だったりします。ようは、どこに人生のライフスタイルの軸を置くかということなのです。

日本人は物持ちがいいけれども大事にはしません。10年使った冷蔵庫は汚いでしょう。けれども私がよく知っているアメリカ人の家庭にある10年使った冷蔵庫はピカピカでキレイです。なぜかという中までキレイに手入れがなされているからです。自分たちの生活空間を清潔にし、クオリティライフをよくしようと努力します。それを夫婦が一緒にやるのですよ。

野口 その言葉、ドキッとしますね。日本では、お父さんは家では何もしないことが大切にされているというイメージがありますが、これからはむしろ夫婦で仲良くできるということが豊かな家族というコンセプトですね。

マリ アメリカ人もケンカしながらやっていますけど、日本では生きるための共同作業が少ないのです。都心のマンションに住んで、コンビニが近くにあって欲しいものはいつでも買える。一人でも生きられる人生です。けれども海外で生活すると、公共交通網からしても、生きるということからしても、一人では非常に不便が多いです。だから保護をする人、助ける人、ボランティアなどが定着しているのです。

嫌いになるまで持ち続けること

野口 マリさんのお話をうかがって、豊かさへの希望を持

つということは重要ですが、難しいという気がしてきました。絶対力が低ければ右肩上がりの希望というものがストレートに見えてきますが、物質的にも精神的にも飽和状態に近くなったときには希望は見えにくいと思うのです。そのときにはどうやって希望を持てばいいのだろうかということなのです。

マリ どんな人でも、ある一定のものを持ってしまうと、もういらぬという気になると思います。だから、嫌になるまで持ち続けなければわかるでしょう。嫌になったときに初めて、別の価値観を探そうという気になると思います。

本来、豊かさの感じ方にしてもさまざまなのがあると思うのです。だから選択肢がたくさんあるなかで、必要なものを求めることが本当の豊かさにつながっていくと思います。

小松 日本人は、画一的で、選択するという豊かさが足りなかったということでしょうか。考えてみると、日本人は、「あなたの旅行はこういう日程で、ここに泊まって食事はこれです」と、あてがってもらうのが好きですね。選択の幅がたくさんある、その幅があればあるほど豊かだという感覚がこれからの日本人には必要かもしれないですね。

野口 選択は分散が大きいので満足度が高くなる可能性も大きいけれども失望する可能性も大きい。多くの日本企業にも言えることですが、ある競争が起きますと、勝つよりも負けない方策を選び、人と同じこ



とをしてしまう。選択のネガティブな部分に拒否反応があるのだと思います。けれどもその中には選択はないですよ。

曖昧さを定量化して 提案すること 日本の強みを作り出す

野口 日本人が世界に向けて提案できる強みとはどのような点がありますか？

マリ アメリカなどは、Yes/Noをはっきり言うことを美德とします。一方、日本では「まあまあ」とか「いい加減に」とか「適当にやりましょう」といった曖昧な

部分がありますが、この部分は日本の良さとも言えます。ここを定量化して、一つのシステムとして提案していければ日本の強さが出てくるのではないのでしょうか。

野口 なるほど。ある落語家が日本人は優

柔不断だという話をしていまして、ブッシュさんが小泉さんに、「Yes or No? 一言で答えよ」と尋ねると、小泉さんは、「うーん」と考えてから一言、「or」と答えたというオチでした。「or」の世界があるのは、日本の考え方もかもしれません。たしかに日本から出てくる言葉が「TSUNAMI」や「dangou」ばかりだったら寂しい。言葉と一緒に考え方や価値観を輸出するのは大事かもしれない。

マリ 私は、自然の叡智という言葉で2005年愛知万博

では nature's wisdom という言葉で置き換えたのですが、nature (自然) に wisdom (叡智) があるとは知らなかったと欧米人に言われました。なぜなら、意志があるものにしか wisdom はないからです。でも説明していくと、自然にも治療力や自己再生など、実は意志があることを認識してくれるんです。このように、きちんと説明さえできれば、世界の人に、日本のこのようなコンセプトの良さをわかってもらえるのです。

どれだけ豊かに生きてきたかが 友達の多さにつながる

野口 さて、ここまで色々お話をうかがってきましたが、マリさんの考える豊かさとはどういうものでしょうか？

マリ 海外に住んでいる、私と同じ年代の友達には、自家用機を持っていたり、家の敷地内をドライブするだけで1時間くらいかかるような家に住んでいたりします。私と収入はそんなに変わらないのにです。私が「よくこんなところ買ったわね」と尋ねると、人が近くにいるのが嫌だからと答えるのです。街に行くのは飛行機で行き、飛行機は中古車の感覚だそうです。それで休みの日にはNYに遊びに行き、そこに小さなアパートを持っていたりします。ようは、日本では贅沢に思えるようなものが、物価が安い、又インフラ整備が充実しているなどから、人生をENJOYできるようになっています。

小松 僕の考える豊かさは、死ぬときに俺の人生は豊かだったと思えることです。それにはやはり職業生活ではなく、遊びの生活が重要だと思います。そう考えると、やっぱり日本人は遊んでないと。だから21世紀の日本人が幸せになることを考えた場合、

人と人の
間で生まれる
豊かさという価値

豊かさを語る

もっと遊びを充実させるべきだと思うのです。

マリ 私は、社会学が専門ではないので断言していいのかわかりませんが、日本人が遊びに対して足りないと思うのは、「誰」と遊ぶかということです。日本人にはなんでもさらけだせる無二の親友と呼べる友達が少ないように思います。小学、中学、高校、大学と、それぞれに友達を作り、社会に出れば会社で新しい友人関係を築きます。それぞれの学生時代の友達は同窓会などに行くとき懐かしいねということになるけれど、基本的には繋がっていかない。ようするに自分と一緒に育っていく仲間が少ないのではないのでしょうか。実は友達の多さが自分がどれだけ豊かに生きてきたかという象徴でもあるわけです。

小松 なるほど。それって一つの結論ですね。

野口 遊びということ言えば、私は、日本人は遊びの天才かもしれないと思っています。なぜなら日本人は稀有に仕事が楽しいと思っている人種のような気がするのです。それが欧米のレジャーという考え方を知った途端に仕事と遊びの区別をつけてしまい、そこからストレスが生まれたのではないかと思うのです。私としては、公私混同で仕事で遊び、遊びで仕事をするという状況があればいい。そういう意味で言えば昔の日本人は仕事をしながら遊んでいたという気がするんですが。

小松 そうですね、区別していなかったですよ。

マリ そう言われると別の観点から反論したくなってしまうんですが。母に今朝電話をすると、母のところに父の昔の友達が夫婦で遊びに来ていると話していました。1週間滞在するそうですが、彼らが1週

間居ることに対して何の違和感もないのです。いわば空気のような友達なのです。

日本の多くの人は空気のような友達つきあいをしていのでしょうか。自分の思い出には残っているけれども、自分のそばに住んでいるけれども、忙しすぎて会えないのが現実でしょう。

小松 友達を使い捨てにするんだ!

マリ 使い捨てというよりは、自分を打ち明けてないのです。心のつながりがない。そういう点で言えば、田舎の村社会や集落には、まだつながりがあるように見えます。地域に密着している人のほうが本当の豊かさを持っています。あそこのおじいちゃんは一人で生活しているから、今晚のおかずを持って行ってあげようってことになるじゃないですか。プライバシーを保つのは難しいかもしれませんが、ずっと同じ土地で助け合って生活してきているからお互いに昔の思い出を共有できているのです。私たち都会に住む人間にはコミュニティがないのです。マンションには協同組合はあるけども、価値観が共有できていないように思います。

野口 なるほど。コミュニティを持つことで、豊かさが何倍にもなるということですね。

小松 僕は、友達がいるということが豊かさであるということとは全くその通りだと感じました。マリさんは、その点からしても本当に豊かですよ。

マリ ええ、みなさんに支えられて生きていますから。

野口 本日は、人と人の間に生まれる豊かさという価値を知りました、どうもありがとうございました。

インタビューを終えて 野口和彦

豊かさを考えるときに、個人としての豊かさや、社会としての豊かさは考えていても、人と人の出会いによって生まれる豊かさがあるということマリさんから教えていただいた。確かに、自分が豊かであると感ぜられるのは、目の前の人の笑顔を見たときかもしれないと認識させられた一時でした。何を持つかより、何を選択するかが大切という意見にも同感。今回の対談は、

初めて鼎談の形で実施したが、誌面の都合で色々な話で盛り上がり、視点に広がりできなかったこともご報告しておく。対談の後、もうすぐ米国に住んでいらっしゃるお子さんが誕生日なので、いきなり尋ねて行ってびっくりした顔を見るのが楽しみという話をマリさんからうかがった。たいへんお忙しいマリさんですが、豊かさゆとりを最後にまた教えてもらったのが印象的でした。